

京都大学	博士 (工学)	氏名	竹内 泰
論文題目	京都における地蔵の配置に関する研究 都市形成と聖祠の配置の関係に注目して		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文では、歴史的都市における街路や広場などの共用空間に置き、祀られる小さな宗教施設を「聖祠」とし、特にその配置に注目し、聖祠の配置とそれらが置かれる都市の形成過程とを関連付けることにより、その都市の特質を新たな側面から明らかにしていこうとする都市史研究である。本論文では、京都における地蔵を対象としており、全5章で構成されている。巻末には各章での分析の基となる文献調査及び臨地調査で得られた情報が付されている。</p> <p>第1章では、聖祠に関する文化的背景を整理し、聖祠を置き、祀る人々と聖祠との間に形成される内発的な相互規定関係、政治や宗教等の外部から及ぼされる外発的影響という内外二重の影響の下に聖祠が配置されているとする視点を、本論文の前提として示している。また、京都における地蔵の配置に関する研究の目的と方法ならびに研究の位置づけと意義について述べている。</p> <p>第2章では、京都に地蔵が市中に置き祀られ始める近世初期の配置経緯とその配置、また現代における配置変化と要因について検証している。近世初期から近代初期までの諸史料、具体的には祭礼記や紀行文、随筆等の文学作品、町触を中心とした公式文書や絵図類、町有文書のうち主に近代初期に地蔵撤去を命じる京都府令が布達される直前に作成された町絵図を基に、地蔵の配置に関する記述或いは描写を詳細に分析し、京都の都市生活の基本単位である町において、街路の辻部への配置が近世における地蔵の基本的配置形式であったこと解明している。また、その配置には日常生活の活動を阻害しないという合理的な配置原理があったことを指摘している。加えて、町絵図において記載された50件の地蔵については、臨地調査から地蔵の配置変化の実態を示すとともに、町内の古老へのヒアリング調査から配置変化の時期や要因の実情を明らかにしている。主に戦前から現代までの情報を中心にまとめ、地蔵の配置変化の時期や要因についての傾向を浮き彫りにしている。戦前より前の情報については口述者の年齢から十分に得られなかったため、近代初期から現代までの地蔵の配置変化を時系列的に整理するという課題は第3章へと引き継いでいる。</p> <p>第3章では、地蔵撤去を命じた京都府令以降から現代までの地蔵配置の変化について検証し、それらの配置変化を道路の整備経緯と関連付け分析している。近代初期から現代までの連続的な史料として、京都の地方紙に注目し145年間分の新聞記事から、地蔵に関連する記事と併掲されている画像を抽出し、地蔵の配置及び地蔵の祭礼(地蔵盆)の開催状況等について分析している。これまで地蔵の諸研究では、新聞記事は部分的にしか扱われてこなかったが、京都の地方紙が、地蔵に関し、一般に共有されている基本的な知識を前提に読まれ、また書き続けられてきた背景から、それらを一連の記録として捉えている。近代初期から現代までの新聞記事を総覧の上、整理することで、これまで必ずしも明らかにされてこなかった近現代における地蔵の配置、地蔵の祭礼場所や祭礼形式について、時期や要因とともにそれらの変化を明示している。更に、地蔵の捉えられ方や扱われ方、社会的な位置づけの変化についても克明に示し、近代から現代までの地蔵の配置変化の経緯を解明している。これらから、高度経済成長期の道路整備と連動し、道路での祭礼状況が変化し、道路以外への空間へと祭礼場</p>			

京都大学	博士 (工学)	氏名	竹内 泰
<p>所が変化していく過程を明らかにしている。また、近代以降の京都における道路整備経緯を物理的側面と法的側面から整理し、一般道の舗装経緯や拡幅実態とともに示すことで、官民境界際での地蔵配置の変化と道路環境の変化との相関を示している。</p> <p>第4章では、京都市内の上京区、中京区、下京区の52の元学区を対象に、平常時（地蔵盆が行われていない時）の地蔵配置及び祭礼時の祭礼状況に関する臨地調査を行い、それらの分布状況を提示の上、分析を行っている。平常時の地蔵については、1208件の配置状況を明らかにし、公共地、半私有地、私有地、共有地といった性質の異なる場所での配置状況を分類している。また、第2章と同様の検証方法を用いた町での配置特性の分析を行い、主要な4つの配置類型、①近代初期以前の基本的配置形式であった辻部への配置、②町中央部への配置、③町界部への配置、④町領域に依拠しない配置を抽出し、それぞれの分布を示すとともに、④の配置が最も多い現状を明らかにしている。同時に、私有地での配置のうち、特に性質の異なる配置として、建物と一体化した配置（半一体・一体型）と道路から建物がセットバックすることで生じた空地への配置（セットバック空地型）を抽出し、それぞれの配置の発生経緯を調査から明らかにしている。その結果、1980年代後半以降の建築基準法改正により生じたマンションなどの中高層建築物の空地が、地蔵の配置場所となりつつある状況を明らかにし、地蔵の配置が、土地所有や開発の外的影響から、町領域に依拠するのではなく、町内の諸事情から都度好条件な場所へと配置が移動していることを指摘し、④の配置が現代の地蔵配置の特徴となっていることを指摘している。また、祭礼時の地蔵については、724件の祭礼状況を明らかにしている。祭礼形式では固定型、移動型、出現型の3類型を抽出、祭礼場所との相関を示し、祭礼形式と祭礼場所の関係から町内相互に負担を軽減する仕組みを持つことを解明している。地蔵が祭礼される程度を示す祭礼率の分布からは、調査対象範囲の南側と都心部に祭礼率の低いエリアが集中していることを明らかにし、そこでの祭礼維持の仕組みの不継承と居住形態の変化の可能性を示唆している。また、祭礼場所の多くが路面の私有地内駐車場で行われ、高度経済成長以後の道路環境変化により道路内の祭礼が排除されてきた一方、私有地内の車両用空間がその代替え空間として補完的関係を成し機能していることを明らかにした。</p> <p>第5章は結論であり、各章で得られた結果を要約し、総合的な考察を行っている。京都の地蔵が、近世では町内の家持や町役を中心とした共有物であり、共有の信仰対象ではあったが、同時に町内組織の構成維持のためにも必要な存在であり、当時の空間利用との関係から配置が決定されていたことを確認している。また、近代初期に撤去を命じられ地蔵の存在が再設定されて以降、約一世紀の期間をかけ、空間的、制度的、社会的な外的影響を受けながら、高度経済成長末期に一旦はその存在と祭礼の意義を、町内の紐帯を再確認する点に内発的に見出されてきたが、信仰や祭礼に対する意識変化、或いはそれを運営する町内そのものの組織組成や必要性において、改めて内発的に見直されつつあることを再整理している。さらに、京都の地蔵が、本来的に近世における社会構成のなかで位置づいた存在であったことを批判的視点から再確認することの必要性を述べるとともに、近代初期以降の複雑な社会変化に応じ、人々が日常生活における複雑かつ繊細な調停の術を、地蔵継承の仕組みに緻密に組み込み、その配置を臨機応変に検討し移動させることで地蔵の多様な配置を生み出し維持されているその点に、現代の地蔵の価値を見出している。</p>			